

あとがきにかえて

日蓮宗現代宗教研究所 主任 高 佐 宣 長

第十回日蓮宗教化学研究発表大会は、平成二十一年十一月五日、宗務院で開催されました。この小冊子は、当日の発表内容を収録したものです。

教化学研究発表大会は、平成十二年五月に第一回が開催され、その成果は、翌平成十三年三月「教化学論集 1」として刊行されました。

「布教の現場」に立脚した「教化学」の確立を目指す現宗研にあつて、宗門教師のみならず、寺族、檀信徒をも含めた、まさに「現場」の学を発表する場として設けられたのがこの大会であったと言って宜しいかと思われます。

「教化学論集1」の巻頭には、当時の石川浩徳所長が、「発刊にあたって」と題して次のように書いておられます。

第一回日蓮宗「教化学研究発表大会」が行われた。この大会の意図するところは、広い視野に立つて教化を考える情報交換の場にし、それを平素の教化の現場に役立ててもらいたいのはもちろんだが、中央と教区の研究会議を一層効果あらしめたいというところにあつた。更には教化学の確立への足掛かりにもしていきたいとの考えも含んでいる。

本宗の宗是は布教伝道にあり、当然ながらそれは教団にとつての生命線である。教化法は布教伝道の手立てである。手立てをしっかりと組み立ててこそ効果ある布教伝道が期待できるのである。（中略）

目まぐるしく変化する現代社会にあつて、法華経をすべての根幹に置いて生きる教団として、具体的諸問題にどう対応して行くのか、いま正に問われている。日常生活の中の法華信仰のあり方、教団組織のあるべき姿、他教団とりわけ新宗教への対応、人権問題、環境問題、平和問題、臓器移植の問題等々。山積するこれら今日的諸問題に対して、国家社会の体制に流されることなく、仏教の教えに即した解決策を明示していかねばならぬ。それは日蓮聖人を宗祖と仰ぐ我々の当然の使命であろう。

布教教化はいつの時代にも生きたものでなければならぬ。本宗の教団の特徴は、動きの中に活路を見いだし、教線を拡張し今日の教団を形成してきたという歴史がある。その歴史に学び未来を開く宗門作りと、常に機能的な布教教化の実を上げる努力を怠ってはならない。

現宗研は「教化学」ということばを掲げて歩みを進めて来ました。アカデミズムとは一線を画しつつ、かと言ってジャーナリスティックになるのでもなく、時代状況を的確に捉えながら、それに対応する布教伝道の手立てとなるべき教化法を、アカデミズムの評価にも耐え得るように研究する、ということであろうかと考えます。あくまでも現場に立脚しつつも、現場に埋没せず、地に足を着けながらも、大所高所からの視点を確保する、という、言うは易く行は難きことの実践を目指す営み、とでも申しましょうか。

『教化学論集1』で、当時の主任であつた影山教俊師は、「仏教学や宗教学の学問性が『宗教そのものを補償していない』」ことを指摘し、その故に、「宗教活動の現場からの声として『教化学』の確立が急がれ」なければならない、として、次のように書いています。

いま仏教学や宗教学に比して宗教活動の現場の声としての「教化学」を確立することが急務であると言える。

では現場の声としての教化学とは一体どのようなことなのだろうか。その教化学の視線とはいかなるものを指すのだろうか。今まで教化学という場合、そのほとんどが教化する側からの問いかけであった。しかし、教化には教化される世間があり、そこには今という切口からの問いかけが必要である。

この今という切口の向こう側の世間を知ることが、教化学の一つの視線である。

（中略）

宗教もその時代の人々に受け入れられるために、今という切口の向こう側にいる人々が、どのような立ち居振る舞いをしているのか知る必要がある。その時代と大衆のスタンダードに沿った色や形のメークアップをするには、スタンダードを知らなければならない。ここに教化学の一つの視線がある。教化学とは単なる日蓮教学の現代化ではないといえる。

影山師の言うところは、「時代のニーズ」ということであろうと思います。これを知り、これに合わせなければ、効果的な教化がなされ得ないことは申し上げるまでもありません。一方、これに媚びたのでは、教化が教化でなくなってしまうことになりましょう。時代に阿諛するのではなく、時代に適合して、教化の実を上げる。またまた「言うは易く……」の句を用いたくなるところですが、こうした「厳粛な綱渡り」（某ノーベル賞作家の言葉を借りました）にも似た企てが、「教化学」なのかもしれません。

かくの如き、教化学の確立への、小さいながらも真摯な取り組みの成果が、この「教化学研究」誌です。

教化学研究発表大会の成果は、第五回まで「教化学論集」として刊行され、六回から九回までは「現代宗教研究」誌に併収してりましたが、第十回を期に再び別冊とし、「教化学研究」と改題しました。

個々の論攷は、発表者それぞれの関心に応じ、おのおのの活動に基づいた研究調査の成果です。

特別発表は、現宗研から依頼してのものです。平成二十一年は、おふたりお願いしました。

吉田尚英師の自死対策に関する発表は、日頃から熱心に自死対策活動に取り組み、宗門運動「いのちの活動」プロジェクトにも協力されている師に、本宗の現状について考察して頂きました。「現代宗教研究」第四十四号所収の、宗門運動本部企画推進会議の「いのちの活動プロジェクト」による「いのちの活動」についてのアンケートの報告書をも御参照頂ければと存じます。

新聞智照師の立正平和運動についての発表は、運動が始まって半世紀を迎えた立正平和運動について、最初期から取り組んで来られた師に語って頂いたものです。

いずれも、宗門運動の「いのちの活動」、「世界立正平和活動」を進める上で、有益なものであると確信しております。

「教化学研究発表大会」は、日蓮宗「教化学」の確立を目指し、共に精進する場であり、上述の通り、発表の門戸を、本宗教師はもちろん、寺族、檀信徒にも開いております。

本誌を御高覧頂いた皆さんの、次回大会への御参加を御期待申し上げます。大聖人の教えを広め、立正安国を実現して行く方途について、是非、御知見を御発表ください。

尚、小誌の表紙は、「教団論セミナー」の内容を収録した「現代宗教研究」別冊に引き続き、所員の三枝あいかを担当しました。清新な教化学の確立を目指すにふさわしいものになったのではないかと思います。例によって例の通り、主任を始めとするメンバーの我が儘な注文を高次のレベルに高めてくれた女史の功であることを申し添えます。尚々、小稿は、「宗報」平成二十年四月号所収の拙稿「現宗研日より 教化学研究発表大会について」を、部分的に流用しておりますことをお断りいたします。